

【訓読用】

『基元節記念版 天聖經』

第二篇

第三節 真の父母の勝利圏相続

1 地上に真の父母が現れなければ、霊界には神様の息子、娘が永遠にいなくなっていたでしょう。先生によって、初めて本然の息子、娘たちが生まれるようになります。先生によって神様の皇族が生じるのです。皆さんは、そのような自負心をもたなければなりません。私たちが、すべての国を本然のエデンに連結しなければなりません。それで、先生が宇宙世界を越えて勝利的な基盤を築きました。真の父母が、そのような基盤を築いたのです。真の父母が成したことを、真の子女たちに相続してあげなければなりません。

真の父母の勝利圏

2 真の父母の勝利圏は、サタンとの闘いで勝利したことです。個人的な圏で勝利し、家庭的な次元で勝利し、氏族的、民族的、国家的、世界的な基準で完全勝利を収めたのです。決してたやすくはない、険しい路程でした。しかし、万難を克服して勝利を勝ち取り、「神様王権即位式」を奉獻することによって、神様までも解放してさしあげる奇跡を成し遂げました。没落した共産主義諸国までも、真の父母は、再び真の愛で赦してあげ、抱いていくのです。

3 真の父母様の勝利圏は、個人が失ってしまい、サタンがもっていたものを取り戻してきたことです。個人を失ってしまいました。エバのゆえに、アダムまで失ってしまいました。アダムが取り戻されたので、世界の女性を取り戻してこなければなりません。それで、一九九二年四月十日、お母様を立てて、女性解放運動を中心として取り戻してくるのです。母の時代に入っていくのです。母の時代です。

4 真の父母が勝利したということは、偽りの父母によって失ってしまったすべてのものを取り戻して回復したということです。真の息子がいて、真の娘がいて、真の夫婦がいるようになったのです。真の夫婦によって、真の孫から千万代の子孫まで、善良でない人がいない一族を残すことができる根が、真の父母です。

5 真の父母様の勝利圏は、個人に限ったものではありません。宇宙史的のです。それを相続しなければなりません。相続しようとするれば、アダムとエバが絶対信仰をもつことができず、絶対愛で一つになれなかったことによって失ってしまったものを、血統的に汚されたものを清算しなければなりません。そのために先生が勝利の覇権を築いておいたので、本然の軌道に従って、個人から上がったたり下がったりしなければなりません。思いどおりに行ったり来

たりしなければなりません。

神様と人間を平面的に見れば、あの世界の果てに神様を引き離したので、父母様が行って神様を迎えて家庭に戻ってきたのです。縦的に八段階です。縦的、横的にすべて克服し、サタンの讒訴圏を脱したので、思いどおりに神様を家庭に迎えることができ、国に迎えることができる時が来しました。

6 先生が真の父母の名を誇るができるのは、どうしてでしょうか。愛を中心として、塞がれていた扉を崩し、歴史時代を通して縦横のすべての段階的分野をかき分け、門を開放できる内的心情圏を備えたからです。そのような勝利的基盤は、私の喜びだけではなく、天地が喜んであげ、歴史が喜んであげ、時代が喜んであげなければなりません。そのような段階で喜ばなければならないのであって、歴史を否定し、過去を否定して喜んではいけません。過去、現在、未来に共に喜ぶことができる内容で残されなければなりません。

7 血統を転換し、所有権を転換し、心情圏を任せ、絶対信仰、絶対愛、絶対服従する家庭を中心として、カインとアベルの形態がつくられなければなりません。勝利的覇権を握った家庭が勝利することによって、「『真の父母』と成約時代」、「『真の父母』と成約時代の安着」が出てきたのです。家庭的にすべて安着したので、世界の家庭を相対的主体として認めることによって、真の父母の勝利圏を相続するようになります。そうしてアダムとエバの四位基台圏を中心として、個人的、家庭的、民族的、国家的へと、公式基盤が大きくなっていくのです。大きくなっていくときは、一度に大きくなるものではありません。世界は、国家の中心であり、国家の目的地です。国家は、世界に行くことができる基点になるのです。

8 真の父母を誇って愛さなければなりません。真の父母と成約時代、真の父母と成約時代の安着です。真の父母が安着して、真の父母と真の父母の勝利圏を相続してあげるのです。安着したので、祝福してあげることができるのです。世界的安着です。相続してあげました。すべて相続してあげたので、墮落した人々は感謝しなければなりません。真の父母を褒めたたえ、真の父母を愛さなければなりません。今まで天の父母が私たちに待ってきたので、反対に「祝福し、誇り、愛します」と言って、その天の父母を褒めたたえて誇らなければならないのです。それが、天の家庭の悲しみを解消させることです。

9 アダム家庭は失ってしまいましたが、その失ってしまったものが世界的な形態で完成されたので、これを真の父母が総合して戻さなければなりません。偽りの父母の愛と生命、血統によってこのようになったので、真の父母が、個人、家庭、氏族、民族、国家、世界と宇宙のすべてのものを神側へ取り戻さなければなりません。偽りの父母によって完全にこのようにひっくり返ったのですが、真の父母がこれを戻すのは、家庭だけではありません。天上と地上のすべての完成圏を蕩滅復帰して、家庭を中心として再び整備しながら、氏族と民族など八段階をすべて收拾しなければなりません。偽りの父母によって家庭を失ってしまいましたが、この家庭で收拾されたものを、神様にお返しすることはできません。宇宙のすべての

勝利圏を越えた位置で收拾するのです。

10 今、多くの宣布式を行っています。「天地父母宇宙安息圏」や、「世界平和統一家庭連合の定着と蕩滅解消宣布式」など、多くの式を行ってきました。峠を崩して平坦にしながらか来の世界の基準にしようとすれば、やむを得ません。そのような過去の実績をもった人でなければ、真の父母になれません。メシヤになれません。再臨主になれないのです。

勝利圏を相続する道

11 成約時代の安着とは、真の父母の家庭を中心として大きな家庭になり、プラスになったのです。人類は、すべてマイナスです。すべての家庭が、プラス家庭の相対家庭になるのです。父母様の家庭と、完全にマイナスの立場で一つにさえなれば、すべて同じ位置に上がっていくのです。これが宇宙の公式です。そのようになるためには、三大条件が必要です。第一に、血統転換をしなければなりません。第二に、所有権を転換しなければなりません。次は、心情圏を転換しなければなりません。心情圏は、個人、家庭、氏族、三段階です。これが一つの範疇になっています。分けることができません。ですから、氏族的メシヤは、三段階を一つの範疇に連結するのです。そして、皆さんがこれを経て国に行くことができるのです。

12 神様の創造理想的愛の主流である絶対の愛、唯一の愛、不変の愛、永遠の愛を中心として、真の愛、真の生命が完全に正しい位置の純情、純潔、その次に純血、血統です。その次に純愛です。家庭定着をして、孝子の家庭、忠臣の家庭、聖人の家庭、聖子の家庭で、平面的に天下が統一された一つの位置に立ち、すべての勝利の覇権を代表できる花のような、香りのような位置で相続を受けなければなりません。

13 長子になって長子権を相続しようとすれば、サタンより優れていなければなりません。すべての分野で神様を身代わりし、原理原則に従って「私が責任をもつ立場に立ちます」と言わなければなりません。神様をより愛する人が、褒美を受けるのです。それがあがるゆえに、復帰摂理をすることができます。愛を中心として相続するようになっているので、この原則によって長子の特権を取り戻すことができます。サタン世界の息子、娘が父母に孝行するよりも、天の側の息子、娘はもっと孝行しなければならず、サタン世界の人々が家庭を愛し、国と世界と人類を愛するよりも、天の側の人々はもっと愛さなければなりません。すべての面で先に立たなければなりません。これは強制ではなく、自分の意思でなければなりません。

第四節 真の父母の伝統相続

1 エデンの園で、墮落によって兄が弟の命を奪うという事件が起きたので、そのような現象

が世界的に起き、墮落の実を収める収穫期が来るのです。今が、そのような時です。この世の中が、このまま流れていってはいけないので、それを収めるための刈り入れの時期、すなわち収穫期に入ってきたのです。墮落した父母の因縁により神様から離脱した伝統を受け、この世界がこのような姿になりました。ですから、真の父母が来て、新しい主義を立てなければなりません。それが世界主義でしょうか、宇宙主義でしょうか。真の家庭主義です。真の家庭主義が出てこなければ、世界主義が出てくることができません。

この真の家庭主義の代表者は、神様の真の息子にならなければなりません。彼は、神様の心情的なすべてのものを相続する内情的な相続者であり、外形的な相続者であり、そして万物の所有権の相続者にならなければなりません。言い換えれば、神様の心を相続できる方であり、体を相続できる方であり、万物を相続できる方であればなりません。そのような息子であってこそ、神様の代身者になることができます。その息子が来て、初めて天国が成されるようになります。

真の父母の伝統

2 今後の歴史は、どのようになるのでしょうか。真の父母の伝統が出てくるようになれば、真の父母を中心として生きた生活圏は、永遠に歴史時代の現実的な伝統の基準として残されるのです。今から千年を歩いていくようになれば、人間は、希望の未来を見つめながら追求するのではなく、逆に千年前のこの時を模範としていくようになります。今まで、墮落した人間は一つの世界を模索してきましたが、一つの世界の中心として決定される真の父母が出てくるようになれば、万民は、その真の父母の伝統を完全に模範として、その中心に従っていくのです。したがって、行けば行くほど、中心を中心とする版図が広がります。ですから、未来の伝統的歴史、希望的歴史の全体を代表でき、未来の時代的な中心の歴史全体を身代わりすることができる基盤が、真の父母の家庭です。神様の六千年の歴史は、真の父母の家庭を残すためです。今日、人類はなぜ苦しんでいるのでしょうか。真の父母の家庭に出会うためです。

3 真の父母の愛とは何でしょうか。これをエデンの園で真の私たちの先祖ができなかったので、ある一時にメシヤが来て、真の父母の代身の立場でこのような愛の伝統を、個人から家庭、氏族、民族、国家、世界まで立てておくことができなければなりません。それが超民族的基準で成し遂げられてこそ、今日、この地上に天国が、この地上に神様の博物館が成し遂げられるのです。このような愛の伝統が、すべての個人家庭を中心として全体的に連結されなかったので、今日、家庭を中心として、神様と結んで愛することができる伝統を立てようというのです。このような驚くべき基盤を築こうというのが、真の父母の使命であり、そのみ旨を受けて成し遂げるのが、統一教会の使命です。

4 心情は、父母の心情で、体は、僕の体で行ってこそ、主人になります。これが神様の偉業です。これは、父の心情をもって涙と汗を流し、血を流してこそ、得ることができます。真

の指導者になろうとすれば、真の指導を受けなければなりません。天の道を行く真の父母の涙、真の父母の汗、真の父母の血を受け継がなければなりません。伝統として残す、涙と汗と血を流さなければなりません。

5 神様と真の父母様の伝統とは何でしょうか。第一は、ために生きること、第二は、投入して、また投入して忘れてしまうこと、第三は、完成に向かって祈りと精誠を尽くすことです。これをするためには、皆さん一人ではいけません。なぜ祈らなければならないのでしょうか。主体である天の協助を受けて、天が私に、共に同調しなければならないからです。その次に、なぜ精誠を尽くさなければならないのでしょうか。環境的与件をすべて受け入れることができる道を築かなければならないからです。祈りは、天との主体的な関係を結ぶためのものであり、精誠は、横的な関係を拡大するためのものです。

6 真の父母の家庭とは、どのような家庭でしょうか。真の父母の家庭は、歴史的な実であり、時代的な中心であり、未来的な起源です。ですから、私たち人類が暮らしているこの世の中が、今後、希望の天国になるとき、その伝統は、真の父母様が生きて逝かれたその生活全体になるのです。国家の思想的な母体は何かというとき、これがその思想的な母体です。また、世界を創建できる起源は何かというとき、これが世界を創建できる起源です。いつでも真の父母と共に、真の父母の子女となったことを中心として、三代圏を成さなければなりません。神様、父母、そして皆さん、このように三代です。横的に見れば、先生、先生の子女たち、その次に皆さん、このように三代です。この三代圏を備えて完成しなければ、天地が統一されないのです。

7 伝統と教育と実践は、真の父母を中心とする伝統、真の父母を中心とするみ言の教育です。真の父母が闘って勝ったすべてのものを、そっくりそのまま継承するのです。祭壇を捧げるとき、万物や息子、娘の分別があってはいけません。そして、旧約時代、新約時代、成約時代の父母に対するサタンの侵犯がない立場で、真の父母が神様のみ前にお捧げし、国連と世界が一つになってお捧げしたあとにすべてを相続することによって、所有権が始まります。

8 神様の六千年の歴史は、真の父母の家庭を残すための歴史です。今日、人類はなぜ苦しんでいるのでしょうか。真の父母の家庭に出会うためです。未来の私たちの子孫は、真の父母の子孫を残すためにあるのです。真の父母の国を残すためではありません。真の父母の世界を残すためではありません。真の父母の国と世界は、真の父母が出てくれば、自然に現れるようになります。真の父母の子孫を残すためだということです。国を必要とするのではなく、父母を中心とする生活を必要とする時が、正に私たちの理想の時代だということです。その時は、既に天と地が、父母の権限によって統治されるようになります。その時には、平民の名前をもって過ぎ去るではありません。ですから、真の父母を中心としてつくられたその伝統は、歴史的な伝統として、億千万世に残ります。これよりも良い伝統はありません。

9 本来、アダムとエバが墮落していなければ、人類歴史は、父母から始まっていたはずですが。父母の言葉がその子孫の言葉になるのであり、その父母の生きていく生活様式が、その子孫たちの生活様式になるのであり、父母が感じた環境的な要件をその子孫たちが感じながら生きていくようになるのです。歴史は、父母から始まるのです。

真の父母の伝統を受け継がなければならない

10 父と母は、愛する息子、娘に、自分のすべてを相続しようとしめます。宇宙の相続は、愛の伝統の上で、同等な愛の価値のある位置を見いだすときに、そのすべてのものを心置きなく一〇〇パーセント相続するようになっていきます。ですから、父母は孝子を望むのです。孝子とは何でしょうか。父母の永遠の愛の同参者として、愛の相続を受け継ぐ人です。

11 皆さんは、皆さんの家庭の主人を誰にしたいですか。父も祖母も、家族全員がどのような人を相続者にしたいでしょうか。より愛する人です。祖父が一番その家全体を愛するならば、家族は、父を差し置いて、祖父にすべて報告するのです。それはどうすることもできません。ですから、ある家の主人になることができる人は、愛の心をもってために生きる人です。愛の心をもって、よりために生きる人が、その愛の家庭の伝統を受け継ぐのです。より愛をもってために生きる人が、永遠の相続の系列に参加することを知らなければなりません。

12 私たちが神様の摂理全体を相続するためには、その伝統に忠実でなければなりません。伝統に忠実になって、責任をもたなければなりません。責任をもったのちには、革命を起こさなければなりません。もしその伝統がお父様の前に正しくないというときは、それを正さなければならぬのです。そして、その正した伝統を全体に相続させるためには、社会環境の矛盾をすべて打開するために闘わなければなりません。そのようにしなければ発展がないというのです。

13 皆さんが歴史的な関係を相続し、時代的な開拓者の責任を果たすためには、神様の復帰摂理に対する歴史的で純粋な伝統を受け継ぎ、現在の生活的環境においてそのような責任を担い、未来の新たな理念の礎を築くために闘争していかなければなりません。

14 天国は、ために生きる人が行くところです。自分を世界に投入しつつ、世界と連結し、世界を抱いて世界以上の位置を求め、神様に侍るための愛を求めてさまよう人が、天国の主人となるのです。このようなことを誇らなければなりません。父と母を誇り、妻と夫を誇り、息子と娘を誇り、兄弟を誇らなければなりません。このような伝統を中心として、これを国に拡大して適用し、その公式を世界に適用し、宇宙に適用しなければなりません。このような人は、どこに行っても同参権、同位権、相続権をもつことができます。

15 先生が皆さんに相続してあげるのは家庭的勝利圏です。その家庭はいかなる家庭なので

しょうか。世界を代表する家庭です。メシヤ的使命を果たす家庭は、世界を代表した家庭として、すべてのものを抱いて引き受けることができ、世界万民を代表して往来させることができる家庭です。そのような家庭になりなさいというのです。五色人種がその家庭に深く入り込もうとし、その家庭と関係を結ぼうとするとき、それを阻み、「この人だけは良い」というようなことをしてはいけないのです。ここで、すべての力と作用は間違いなくこの点を通じなければならないのと同じように、心情的中心として、すべての万民の心情がその中心点を通して四方へ伸びていくのが原則です。家庭が中心です。ですから、天国も、真の核心的家庭がない限り、成し遂げられません。

16 祖国と故郷を訪ねて定着できる基地が、家庭です。その家庭で、どのようにして暮らさなければならないのでしょうか。父に出会って、涙とともに酔いしれて暮らさなければなりません。皆さんの国、皆さんの家庭のためです。私の家庭を取り戻し、涙の伝統、血の伝統、汗の伝統、鼻水の伝統、四肢五体の伝統を新たにつかみ、皆さんの二世、三世、千々万代の血族が、変わらない純潔、純血、純愛、純性を残さなければなりません。上下、前後、左右がきれいであればなりません。そうであってこそ、きれいな血統の純血、純愛になるのです。真の愛、真の生命、真の血統の純愛を中心として、純性の門を通して純種を植えなければなりません。

17 よりみ旨のために苦勞しなければなりません。そのようにすれば、すべての人々が、そのあとに従っていきます。誰が教会のために犠牲になり、誰が教会のために自分の一家を犠牲にし、誰がより苦勞し、より心情的伝統に近いかが大切なことです。末端にいる人が、み旨のために、夜も昼も祈って、血と汗を流しながら愛の精神を具現しようとするれば、その人が女性であろうと男性であろうと、天は、その人を通して新しい歴史を連結していくのです。統一教会は、既にそのような伝統が立っています。先生の息子、娘の中で、誰が先生の後継者になるのかという問題も、誰がみ旨に対してより多く犠牲になり、誰が孝行の道理を尽くすかにかかっています。すべて同じです。家庭でもそうであり、教会でもそうであり、すべてそのような伝統に従っていかなければなりません。

第五節 真の父母のみ言相続

1 皆さんの個体内で、心と体が分かれて毎日闘っているのですが、それは、神様のみ言で收拾しなければなりません。神様の人格と心情で收拾しなければなりません。私が私を愛することを神様が好まれ、私を立てておいて神様が認めなければなりません。私が語ることを、神様がそのとおりに認めなければならないのです。そのような実体になるためには、生活圏内で私をどのように統一させるのか、私の自体内でどのように統一戦線を構築するかという問題が、最も急がれるのです。私がそのような実体になれるかなれないかということを知るために、出て行って精誠を尽くし、み言を伝播してみるのです。そのようにしてみれば、み言を中心として、神様が常に共にいらっしゃることを知るようになるでしょう。そのよう

になれば、み言を中心として、神様が常に共にあられます。

原理とみ言の価値

2 み言を通して、神様と連結されるのです。み言でなければ、神様と連結されません。み言なしには、連結性を見いだすことができません。み言を宣布する実体がなければ、何にもなりません。神様と人間が連結されるのは、神様の愛に連結されることが目的です。人間を神様と連結させることができるみ言を宣布する人は、地の人です。しかし、その人の伝えるみ言は、神様のみ言なので、そのみ言で新しい人がつくられるのです。

3 墮落というのは、神様のみ言を立てられなかったことによってもたらされたことなので、み言を中心として訪ねてくるこの道の中で、私たちは、神様のみ言を絶対に立てようという群れです。それでは、神様のみ言に頼る人は、どのような人なのでしょうか。最大の公的な人であり、世界と人類のために生きる人であり、神様のために生きる人です。神側から見るとき、神様の現在の立場に立とうということではなく、神様の理想の位置に立とうということであり、現在の人類の位置に立とうということではなく、現在の人類の位置を越えて、人類が求めていく理想の位置に立とうということです。神様の理想に生き、神様のあすに生き、人類のあすに生きようという人です。ですから、どれほど苦勞が多いのでしょうか。ここで、未来の世界を建設しようという群れになろうということです。そのようになれば、神様があすを思うときは、先生と統一教会を思い、人類があすを思うときは、統一教会を思い、先生を思うという結果が出てくるのです。

4 神様は、み言をもって私たちを呼び求めていらっしゃるので、私たちはそのみ言どおりに行かなければなりません。真の父母と真の子女が相まみえることができる道は何でしょうか。真のみ言を通じることです。そのみ言は父のみ言です。父のみ言を知らずしては、子女になることができません。父のみ言が絶対的であり、真のみ言であるとするならば、同じみ言を千年、万年聞いても飽きません。終わりがありません。そのようなみ言を求めていかなければなりません。そのみ言は、ある論理的な条件にぴったりと合うからといって、それで終わるものではありません。大原則でありながら、聞いて、聞いて、また聞いて、永遠に聞いても生命となり得るみ言です。

5 愛する父母のみ言は永遠です。時間と空間を超越しているのです。ですから、神様のみ言は歴史を超越します。時代を超越します。主義を超越します。思想を超越します。どこの誰の言葉よりも貴いのです。そのみ言は、夜聞いても、昼聞いても、夜見ても、昼見ても、皆さんの心に無限に流れ込んでいくのです。

6 イエス様がユダヤの民に対しておっしゃったみ言と、彼が現したすべてのものは、自分一身のみ旨ではありませんでした。天のみ旨でした。イエス様は、神様の摂理のみ旨を身代わ

りしていたのです。しかし、イエス様を通して神様のみ旨と向き合わなければならない墮落圏内の民とイエス様の間に、相反する論争が起きました。墮落した世の中に、神様のみ言が現れるとき、このみ言が個人に現れれば、個人を革命でき、民族の前に現れれば、民族を革命でき、世界の中に現れれば、世界を革命でき、また天と地を新たに革命できるみ言として現れることを、その時のユダヤの民たちは知ることができませんでした。

7 み言の主人は、先生です。み言どおりに生きたので、み言の主人になりました。み言の主人になれなかった人間が真の父母になれなかったので、真の父母になってみ言の実体を成し、神様のみ前にその実をもって捧げてこそ、創造目的の理想が解放、釈放の時代に越えていくのです。

8 先生のみ言を消してしまう人がいません。五十年前に先生が語ったことを、私自分が再び聞いても敬拝します。その時、先生がどれほど深刻な立場で語ったことか、天の価値あるみ言を、先生が死んでもきれいにそのまま残すという深刻な立場で語られました。実際、そのみ言は、先生が死んでも世界を支配することができる内容です。皆さんがみ言の本を読んで、そのような感動を受けなければなりません。靈的体験をしなければなりません。遊んで踊ったりすることも貴いかもしれませんが、そのみ言に酔いしれ靈的に育つことが、天上世界でも、地上の子孫たちにとっても、福の中の福であり、貴いのです。

9 どんなに多くの新聞の内容も、コンピューターに保存しておけば、千年後、万年後でも見ることができます。先生の語った内容が多かったとしても、CDにしておけば、コンピューターを通して億万世界の億万の場所でも使うことができます。そのような時代になったのです。ですから、偽りを隠すことができません。隠す所がありません。天のみ言、天の愛のみ言が世界的に光を発するので、暗い勢力は自滅するのです。次第に遠い所に行かなければなりません。光が照らし始めれば、光が照らすことができる限界圏内では、光以外の暗闇が支配することはできません。

10 千年後に、統一教会の先生のみ言がなくなるでしょうか、なくならないでしょうか。これを考えると、問題が大きいのです。皆さんの懐だけに残らず、み言が流れ流れて、生水ではなく薬水となり、千年後にすべての人が飲んで万能薬だと誇ることができる生命のみ言として残ることを願いながら、精誠を尽くしているのです。

11 統一教会の真理は、統一教会の歴史の中で闘いの路程によって明らかになった真理ではありません。これは、創世以前から、真の父母との絆を中心として、真の家庭、真の氏族、真の民族、真の国家、真の世界を創建しようとした神様の創造理想の中にあった真理です。また、神様の復帰摂理の理想までも内包した歴史的な絆をもっている真理です。

12 絶対信仰の先祖となり、絶対愛の先祖となり、絶対知恵の先祖となる方が、真の父母で

す。それで、原理のみ言を絶対信仰の中で、絶対愛の中で、絶対知恵を備えて探し出したので、天に対しても、サタンに対しても、人類歴史に対しても、この原則を否定せずに肯定することができる、覇権をもつことができる一つの盾なのです。

13 「統一原理」は、自然法則によってすべてのものが連結しているので、原理であると言うのです。天的な原理です。永遠に変わらない原理なのです。原理は、教理ではありません。統一教会の教理ではなく、真の父母が教えてあげる教理ではありません。教理とは、墮落した人々が天を求めていくためのものですが、天と共に生きる人に、何の教理が必要でしょうか。天的な法が必要なのです。

14 先生のみ言は、皆さんが聞いても、すぐに理解できないでしょう。しかし、本になっているものを何度も読めば、間違いなく理解するようになります。先生は、そのように広大な世界を総括して分別し、比較し、対照して、配列していく頭をもっているのです。この世界のすべての知識世界を收拾し、原理という伝統的な基準を中心として、理論的な体系を完璧にしたのです。数千、数万人の学者たちも、その価値を認めざるを得ません。統一教会は、そのような恐るべき武器をもっています。

15 先生のみ言は、統一教会が歴史になくなったとしても、主流思想として、いつでも頂上に残る思想です。皆さんができなければ、ある時にすべて成されるようになっています。数多くの国が競争して行う時が来るのです。そうすれば、皆さんは逆になります。先の者があとになり、あとの者が先になるのです。ひっくり返るのです。時を失ってしまった人は、歴史に残ることができません。

16 皆さんは、真の父母を求めていくにおいて、真の父母のみ言、永遠の価値と関係を結んでくれる真のみ言の価値を感じてみましたか。感じてみるができなかったならば、真の価値のみ言を語られる父が来られても、分からないのです。このような真のみ言の価値をはっきりと知るためには、祈らなければなりません。この地上の人間は、真の父のみ言、真のみ言を求めていかなければなりません。そのみ言は、イエス様の心情が動くみ言であり、六千年間摂理してこられた神様の心情が動くみ言です。また、そのみ言がこの地上に出てくるようになれば、六千年の曲折の歴史を明らかにしてくれるのであり、神様の悔しさと神様の無念さと神様の恨を明らかにしてくれるのです。したがって、神様の心情が動かざるを得ないのです。

17 神様のみ言は、ある原則を立てるのではなく、神様の生命と理念をつくるためのものです。今日、この地には、真理を標榜する多くの宗教の教理や主義がありますが、そのまま実践して、私たちの心と体が安らかになり、永遠にそこに染まり得るものはありません。宇宙の生命の源泉である神様の愛が、私たちの心と体を動かしてきたとすれば、神様の真のみ言が出てくれば、すべての主義、主張を根本的に解決することができるでしょう。

18 皆さんは、み言に対する伝統を立てなければなりません。そして、み言とともに一体となることができる人格を備えなければなりません。終わりの日の審判には、三大審判があります。その一番目はみ言の審判、二番目は人格審判、三番目は心情審判です。これが絶対的な基準になっています。人が、神様のみ言と一致した位置に立つことができなかつたのが墮落です。取って食ってはならないというみ言を絶対視して、伝統を立てなければなりませんでした。そのようにすることができずに墮落したので、復帰の路程を歩んでいく人々は、最後に現れる一つの真理のみ言と一つになれる伝統を立てなければなりません。天には、そのような伝統が立てられているのですが、地上に住んでいる人々には、そのような伝統ができていません。もしこの伝統が立てられなければ、統一教会も、キリスト教のように数多くの教派に分裂する可能性があります。

19 み言を中心として、一体となる伝統をどのようにして立てるのかということが、絶対的な問題です。み言はみ言、私たちは私たちになり、かけ離れてはいけません。み言を中心として、自分を育てていくことができる人にならなければなりません。絶対的な基準のみ言を中心として、伝統を立てなければなりません。み言を立てる時の先生の心の基準に、皆さんも接しなければならぬのです。皆さんがみ言を学ぶとしても、み言を中心として学んだその基準で信じるためのものであって、完全なものではありません。そのみ言の背後に伝統的な基準が隠れているので、その基準を体得しなければなりません。ですから、より一層、み言に対する伝統を立てていかなければなりません。

み言集は宝物の倉庫

20 み言集が、どれほどたくさんありますか。今まで皆さんは、み言集に対して関心がありませんでした。どんなに図書館に本がたくさんあっても、そのようなものは神側から見ると、必要ありません。先生の途方もないみ言集を考えてみてください。その中にあるみ言は、この世界の息子、娘を救うためのものです。み言集が原本です。皆さんがそれを買っておけば、代々に誇ることができるでしょう。神様の立場から考えてみれば、最も貴いものがそのみ言集です。真の父母という方は、永遠に唯一であり、絶対的に唯一です。お父様がいかなる方なのかを学ばなければなりません。どれほど深く、高く、広い方なのかを知らないでしょう。お父様の人格を、み言集を通して知ることができます。それは、暗い夜に輝く灯台のようなものです。

21 多くのみ言集が出版されました。先生は、毎朝訓読しています。今からは、集会のようなことをする必要はありません。既に、すべて教えてあげました。氏族的メシヤまで、詳しくみ言を語ってあげました。先生が発展しながらそのようなことを構想してきたのではありません。綿密にプログラムを作成し、そのプログラムの基盤の上で教えてあげています。それが偉大なのです。すべて空想のようなみ言を語りましたが、先生が既にすべて成しました。

み言集をもつようになれば、説教のようなものは問題ありません。膨大な宝物です。お金で買うことができません。

22 先生は普通、三時半になると寢床から起きます。起きて、今まで先生が語られたことを訓読します。途方もない内容です。先生が話してすべて知っている内容なのに、それを訓読するようになれば、思わず涙が出ます。このような貴いみ言を聞いて流れていく人々は、赦される道がありません。皆さんの家よりも貴く、皆さんの地よりも貴いものです。

23 先生のみ言集を、皆さんは何巻くらい読みましたか。深刻なことです。回数を繰り返すほど、さらに光り輝きます。価値が高くなります。それをすべて知らなければなりません。国を立派にし、世界と真理を知っている王がいるとすれば、彼にとって、先生のみ言集は宝物です。今も、先生はそれを訓読しています。死ぬ前に、それを整備しておかなければなりません。間違ったところがあれば、訂正しておかなければなりません。それが間違えば、問題になるのです。

24 先生のみ言集は、今までで何巻になりますか。その感動的なみ言をどこかに行って話すようになれば、涙がぼろぼろと出てくるような場面が本当にたくさんあるのです。先生は、最近でも、毎日二時間ずつ訓読しています。訓読してみると、既に数十年前に祈った祈りに、今日の成約時代の完成が語られていて、私の骨髄に響くほどの刺激を受けました。どうしてそのように祈りが素晴らしいか分かりません。自分の自慢をしているのではありません。今、振り返ってみても、刺激的な印象でいっぱいになっています。そのふろしき包みが、途方もないふろしき包みなのです。

25 今は、説教が必要ありません。説教するのではなく、先生が語った題目を抜き出し、適切な時期に、適切な環境に合わせて使えばよいのです。題目を選び、その題目ごとに、そこにどのような内容があるということを、三行ずつくらいに整理して単行本をつくるのです。そうして、自分が説教する題目を決め、そこに該当する部分を探せば、すべて出てくるようになります。何かの説教をしなければならぬといえ、それを中心としてみ言集を読んで説教をし、祈りも、先生が祈った内容をもってしなさいというのです。天が、それ以上好むものはありません。いつでも、そのように説教しなさいというのです。

み言を伝えて実践しなければならない

26 先生のみ言は、永遠に通じることができる内容でなければならず、私たちの生活環境を越えることができなければなりません。悪の生活環境が、真のみ言をのみ込んでしまうことはできません。真のみ言は、悪の世の中のいかなるものも制裁することができません。み言をもって悪の環境を越え、また越えていくことができる心を誘発させなければなりません、そのようにできないので、今日、全世界のキリスト教が混乱状態に入ってしまったのです。そ

れでは、愛の心をもって来られる父が、愛する子女に対して真のみ言を語られることができる場所が、必ずあるはずで。そこを探さなければなりません。そのような場所を探してみ言を聞けば、何度聞いても新しく感じられるでしょう。真の善の価値として、永遠に通じることができる内容であるはずで。皆さんが、そのようなみ言を探さなければ、真の子女になれません。

27 お父様のみ言は、千年の間、繰り返し聞いても、ひたすら味わいがあります。同じみ言でも、悲しいときに聞けば慰労となり、うれしいときに聞けば祝賀となるのです。皆さんの心の状態、生活感情の違いによって、それに該当する素晴らしい対象の価値として作用するのです。

28 原理のみ言を伝えたことに比例して食口が増えます。原理のみ言をどれほど忠実にするかが問題で。ほかの道はありません。み言で造られた人間がみ言を失ってしまったので、み言で再創造しなければなりません。神様の愛のみ言、神様の生命のみ言、神様の血統のみ言、これが三大要素で。愛と生命と血統で。愛が激しく動かなければならず、生命が激しく動かなければならず、血統が激しく動かなければなりません。蘇生、長成、完成、三つの皮をむいてこそ、人が生まれます。

29 全世界も、先生が語ったことを伝授しなければなりません。ですから、成約時代とともにみ言を伝授するのです。新しい成約時代の宣布とともに、先生のみ言、成約の聖書を全世界に分け与えました。それで、訓読しなさいというのです。皆さんも、み言を中心として一つにならなければならないのです。先生と一つになる前に、み言を中心として一つにならなければならないで。

30 み言のみ言どおりに理解できない人は、み言の審判を受けるでしょう。私たちは、この地上で死んでも、このみ言を千秋万代にわたって、後代の前に残していかなければなりません。復帰の運勢が残っており、神様の摂理がいまだに未完成として残っている限り、このみ言を通じなければなりません。この貴いみ言を整えなければなりません。神様は、このみ言の前に万民がひざまずく日を待ち望まれたのです。真の真理のみ言の前に万民をひざまずかせようと、千辛万苦、受難の歴史を今までかき分けてきたというのです。

31 神様は、サタン世界に愛のみ言を与えてくださるのです。その中から、神様のみ言を絶対信仰する人が出てこなければなりません。言い換えれば、アダムよりも、神様のみ言をもっと絶対的に信じる群れが必要です。神様のみ言を不信させた天使以上に、信任できることをしなければなりません。神様のみ言を聞いて、サタン世界にある体を抜き取ってこなければなりません。体を取り戻してこなければならないのです。

32 皆さんが統一教会に入ってきて原理を通して学んだ真理のみ言を、頭だけで知ってはいけません。皆さんは、そのみ言を頭で知ると同時に、心で知らなければなりません。このように、み言を頭で知って、心で知るようにになるとき、皆さんは、そのみ言の目的を達成するために、動かないようにしても動かざるを得ず、サタンと闘わないようにしても闘わざるを得なくなります。また、自分の口を開いてお父様の悪口を言い、自分の考えを変えて天を裏切る位置に出ようとしても、出ていくことができないのです。

33 御飯は、毎日食べてもおいしいのです。真理に通じる糧は、毎日食べれば、味がおいしくなります。生命のみ言は、毎日食べてもおいしいのです。原理のみ言を死ぬまで聞いても好きな人は、絶対に地獄行きになりません。「すべて知っている！」と言うかもしれませんが、それは、頭だけで知り、心情圏とは何の関係もありません。それを聞けば聞くほど、天の生命圏が訪ねてくるのです。

34 生命を育ててあげる内容はみ言です。二十一日修練を受け、四十日修練を受けたからといって、統一教会員であると考えたら大きな誤りです。原理の本を中心として勉強しなければなりません。自分が感じたことを、原理の本とともに胸にしまっておくようにすれば、いつでも自分の証をすることができます。原理の本で恩恵を受けたことを伝えるのです。

35 第三イスラエルの先祖となるべき終わりの日に身を置いた皆さんは、最後のみ言は、天の愛のみ言だということを知らなければなりません。ですから、皆さんは、神様のみ言はみ言なりにあり、皆さんは皆さんなりにある、それではいけません。神様のみ言の、見える実体にならなければなりません。神様の内的心情が皆さんの内的心情にならなければなりません。すなわち、本心の実体にならなければなりません。皆さんは、神様のみ言を繁殖させ得る第二創造主の使命を果たさなければなりません。すなわち、み言の繁殖体になり、生命の繁殖体になり、実体の繁殖体にならなければなりません。そして、愛を中心として一つになってこそ、神様に永遠に侍ることができるのです。このような基準が第三イスラエルの基準です。このようにしてこそ、み言を植えつけることができ、実体を植えつけることができ、生命を植えつけることができます。

36 み言に無条件に従っていく人になってはいけません。まずみ言を通して主体性を備えた実体、すなわちみ言の主体となって、創造することができる人格を備えなければなりません。ところが、今まで統一教会で原理のみ言を勉強する人々を見ると、心情的基準や人格的基準を見いだすことができず、み言だけで働き、動く人々がたくさんいるのです。これではいけません。み言を学べば、そのみ言を自分のみ言として語ることができなければなりません。原理を語る時、その原理がどこかの師が教えてくれた原理としてではなく、自分の骨と肉を通して生命を得た立場で語らなければなりません。そのような本然の主体性をもってみ言を語るができる人にならなければ、そのみ言で関係を結んだ人々が、自分とは何の関係もありません。ですから、み言を中心とする実体的な人格を完成しなければなりません。